

### 3. 新聞錦絵

新聞錦絵とは、新聞記事とその内容を絵画化した木版の多色刷り版画(=錦絵)を指します。発行時期は明治7年から8年(1874~75)の間に集中し、以降またたく間に終息に向かいました。その最も早い例は、『東京日日新聞』(明治5年2月創刊の日刊紙)の記事をもとにしたシリーズで、明治7年8月に発刊されました。これがヒットすると翌年には、『郵便報知新聞』でも新聞錦絵が発行されます。現在知られる両新聞が発行した新聞錦絵を合わせると170以上に及びます。

メディアとして新聞錦絵には現代の新聞のような速報性はなく、もとになった新聞記事の早くて1~2ヶ月、遅いものでは2年半以上後という時間差があって出版されました。とはいえ新聞錦絵が果たした役目のひとつは、明治初頭に登場した日刊の「新聞」を、江戸時代から絵草紙屋の店頭を飾った「錦絵」を通じて、人々に馴染みのメディアへと橋渡しする点にありました。

新聞錦絵を手がけたのは、幕末の人気浮世絵師・歌川国芳の弟子である落合芳幾(1833~1904)や同門の月岡芳年(1839~1892)でした。内容は、いわゆる現代の三面記事にあたるような人情ものが多く選ばれました。江戸時代、この種の刊行物に規制がかけられていた事情をふまえれば、明治初頭の人々にとって新聞錦絵は、速報性はなくとも充分新しく興味深く、手に取りやすい媒体であったと思われます。

挿図1・2は、『東京日日新聞』の記事をもとにした落合芳幾の手になる新聞錦絵です。画面上の記事によると、1は病気の老母のために谿谷に氷を探しに行った孝行息子、2は漁師が転覆する舟中で家族にしたためた瓶入りの遺書がサンフランシスコに漂着、やがて遺族の元に届けられたという内容です。どちらも画面には額縁を思わせる赤い枠があり、天使がリボン状の横書きの題字欄を持つなど、西洋風の演出がみられます。一方、絵自体は江戸時代の錦絵の武者絵に近

く、特に挿図2は沈没する舟中で決死の覚悟を決めた人というよりは、絵の天地を逆さにすればまるで芳幾の師・歌川国芳の大ヒット作「通俗水滸伝豪傑百八人之巻人」(参考図)に登場する、水中で敵をむんずと捕まえる英雄のように描かれました。挿図3は『郵便報知新聞』の記事をもとにした小林永濯(1843~1890)の作で、力士・綾瀬川が両国橋から身投げしようとする男を救ったという内容です。

絵の細部に注目すると、毛彫りや微妙な顔の表情を生み出す彫りの技術、様々なぼかしを用いた刷りの技術など、江戸時代以来の錦絵製作の高度な技法をそのまま活用していたことがわかります。しかし明治9年頃から「平仮名絵入新聞」が普及し始めると、新聞錦絵はわずか数年間でその役目を終えたのでした。(助教 鎌田純子)



挿図1. 落合芳幾画「東京日々新聞」(明治7年10月)



挿図2. 落合芳幾画「東京日々新聞」(明治7年8月)



(参考図)  
歌川国芳画「通俗水滸伝豪傑百八之巻人 短冥次郎阮小吾」  
鈴木重三編著「国芳」平凡社(1992年)より転載



挿図3. 小林永濯画「郵便報知新聞」(明治8年)

### 4. 「箱館大戦争之図」

明治初頭、錦絵の恰好の題材となったのは、戊辰戦争、西南戦争など維新期の動乱でした。これらには幕末に舶来した赤色の化学染料・アニリンが多用され、いわゆる「赤絵」と呼ばれる明治期独特の特徴が多くみられます。ここに紹介する当館所蔵の男爵大鳥圭介史料のうち「箱館大戦争之図」(永島孟齋画)もそのひとつ。画面右端に検閲の証である改印が捺されていますが、印文不鮮明のため製作年はわかりません。ただし錦絵に改印が捺されたのが明治8年(1875)8月迄となるため、それ以前の作であると推定されます。

三枚続きの横長大画面からは、まるで舞台劇の一場面をそのまま切り取ったかのような印象を受けます。まず目を引くのは、画面中央の、馬上から刀を振り降ろさんとする人物・旧幕府歩兵奉行松平太郎と、松平の刀をうけ仰向けに倒れかかる新政府軍兵。松平に続く馬上の人物が大鳥圭介、その隣で槍を手にした人物が榎本武揚、旧幕府軍の先陣をきって新政府軍に斬り込んで行く人物が土方歳三です。斬り倒されているのは新政府軍兵ばかりで、一見、戦況は旧幕府軍に優勢のように描かれます。背景には遠く日の丸を掲げた船艦と、それと対照的にもくもくと煙を上げて今まさに沈まんとしている船艦とが配されています。全体として旧幕府軍の奮戦ぶりが伝えられる描写・構図となっており、明治初頭の市民感情の一端が偲ばれます。

熾烈な戦闘の末、旧幕府軍は新政府軍に敗れ、明治2年(1869)5月11日、榎本武揚の降伏により箱館戦争は終焉を迎えます。大鳥圭介は、東京大手町の軍務局糾問所に投獄され、明治5年に出獄。その後、学識を高く評価され、明治政府の数々の要職を経て、明治19年に学習院長、さらに華族女学校長を歴任、同33年に男爵に叙爵されました。この錦絵を大鳥が実際に目にしたかどうかはわかりませんが、そうであればたしてどのような思いで、若き日の自分が登場するこの三枚続絵を見たのでしょうか。(助教 鎌田純子)



永島孟齋画「箱館大戦争之図」(明治初頭)